

**主 題：肉に属するクリスチャン 2**  
**聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章5－9節**

私たちは前回から、Iコリント3章からコリント教会の信者たちの霊的な状態について学んで来ています。

**A. コリント教会の信者の霊的状态 1－4節**

**1. 霊的に成長していない 1－2節**

救われて約5年経っているのに、彼らはまだまだ霊的に幼子であった。つまり、聖書のみことばに基づいた正しい判断力がなかったのです。聖書に基づいて、何が神の前に正しいのか？何が神に喜ばれるのか？という判断ができていなかったのです。また、それだけでなく、彼らの間にはねたみや争い、そして、分派がありました。そのことを知ったパウロは、まさに、その生き方はこの世の主を知らない人たちと似た歩みではないかと言います。ですから、彼は「肉に属する人」とか「生まれながらの人間」という表現を使って、彼らのことを責めるのです。

彼らの問題とは何だったのか？それは自分中心の生き方です。自己中心、自分が判断の基準になっていたのです。思い出してください。なぜ、彼らの信仰が成長しなかったのか？それは成長に欠かすことの出来ない聖書を正しく学びそれを日々の生活に実践する、そのことを怠っていたからです。霊的に成長したいと願っていても、そのために必要なことをしなければそれはできないことと私たちはもう十分知っています。みことばの乳を慕い求めなさいとペテロは言っています。Iペテロ2：2「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」

みことばによって私たちの信仰は成長していくのです。また、IIテモテ3：16、17でパウロはどのように教えています。「16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのためには有益です。17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」、もし、私たちが神に喜ばれる者になろうとするなら、みことばに立たなければならぬ、みことばだけが私たちには必要だと言います。ヤコブもこのように言います。ヤコブ書1：22「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」、聞いた以上はそれを実践しなさいと言うのです。みことばを実行すること、そのことを続いてこう言います。1：25「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。」と。ですから、みことばが教えることは明らかです。私たちが成長するためにはみことばが必要であり、そのために神はみことばを与えてくださったのです。みことばを学んで真理を知ったなら、私たちはその真理に従って行く、そして、それによって私たちは成長していくのです。

**B. 信仰者の正しい焦点 5－9節**

パウロはこのコリント教会の現状を知って、今、話したように、彼らが成長していないで、霊的に幼子であることを知って、彼らの歩みを叱責するのです。そして、彼らの関心、彼らのフォーカスが神ではなく人間に当てられていることを問題視するのです。このコリント教会の人たちが称賛していたのは人間だったのです。パウロはそのことを指摘して、神の方にそのフォーカスを向けるようにと教えていきます。

**1. 人への称賛の愚かさ 5節**

人にフォーカスを当てて生きることの愚かさについて、5節から話し出します。「アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰に入るために用いられたしもべであって、主がおののちに授けられたとおりのことをしたのです。」、アポロとは？パウロとは？と、パウロは自分たちは何者かを明らかにするのです。パウロが敢えてこのことを話すのは、先ほども言ったように、コリント教会にパウロ派とアポロ派が存在していたからです。もちろん、先に見たように、この教会にはペテロ派もあったし、キリスト派もありました。そこでパウロは、自分たちはただのキリストの「しもべ」に過ぎないこと、ゆえに、自分たちを称賛することの愚かさを繰り返して教えていくのです。特に、この5－7節で繰り返して教えています。「いったい私たちは何者なんだろう？どうして私たちに焦点が当てられるのだろうか？」、パウロはこう言います。「あなたがたが信仰に入るために用いられたしもべであって、主がおののちに授けられたとおりのことをしたのです。」、

1) しもべ : このことばは新約聖書中に29回使われています。「仕える人、奉仕する人、執事、食卓の給仕をする人」という意味をもったことばです。ですから、このことばは「働いて仕える奉仕者」

のことです。でも、「しもべ」ということばを見たとき多くの人はこれは「デュロス=奴隷」と訳されていることばではないのか?と思うでしょうが、ここではその意味では使われていません。「デュロス」を使うときは神と自分との関係、主人と奴隷の関係を指します。ここでは、自分たちは神から務めをいただいて「仕える者」であると、そのことを言います。パウロたちは「私たちは神から務めをいただいて、しもべとしてコリント教会の人たちのために働きを為したのだ」と、そのことを強調するのです。

エペソ3:7でも「私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。」、コロサイ1:25でも「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」と言っている通りです。

では、どんな働きをしたのか?5節に「あなたがたが信仰に入るために用いられた…」とそれが彼らの働きでした。「信仰に入る」という動詞は「信じる」という意味を持っています。不定過去で使われていますから「信じた」となります。というのは、この人たちはもうすでに「信じていた」からです。ここで使われている不定過去を文法的に見ると、これは「ある状態に入ること」を意味しています(起動の不定過去)。つまり、コリントの人たちが救いに入る、救われる、彼らが信じる、そのために私たちが用いられたとパウロは言うのです。ですから、ここで「あなたがたが信仰に入るために用いられたしもべ…」と書かれていますが、直訳すると「しもべたち、彼らを通してあなたがたが信じた。」となり、パウロとアポロ、彼らを使ってあなたがたはイエス・キリストを信じたということです。そのために私たちが用いられたに過ぎないと言うのです。

こうして、パウロは自分たちがどのような役割かを明らかにすることによって、あなたがたが誉め称えなければならないのは私たちではない、称賛すべき対象は神なのだということを明らかにし、彼らの目を神に向けようとするのです。確かに、パウロやアポロなど、このような働き人に尊敬を抱くことは聖書が教えることです。パウロ自身もIテサロニケ5:12、13でこのように言っています。「:12 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。:13 その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。」、

ですから、このような働き人に尊敬を払うことは正しいことです。でも、だからと言って称賛をするものではありません。称賛に値するお方はただ一人、神です。

考えてみると、私たち人間が為す働きは常に完全でしょうか?私たちの福音宣教は完全でしょうか?私たちが福音を語る時に、ときにはいろいろな思いが出て来ます。「よくやったなあー、」と自分を誉める思いかもしれません。そうすると私たちはもう神の前に正しくない思いを抱いています。でも、感謝なことに、神はそんな不完全な私たちでもお用いになってご自身のみわざを成してくださるのです。私たちはどれ程心を込めて人々にこのキリストの福音を語っても、私たちは人々の心を開くことはできません。それができるのは神だけです。だから、私たち人間は称賛に値する存在ではない、それはすべてのことができる神だけが受けるものです。

5節の最後に「主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。」と書かれています。「授けられたとおりのことをした」、自分たちには神から特別な賜物が与えられたということです。それをを用いて働いたのだとパウロは言うのです。パウロは12:6で「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。」と、つまり、ひとり一人に与えられた賜物を用いて主に仕えることを言うのです。ここには「主がおのおのに授けられた…」とあります。主がその霊的賜物をもたらされたのです。神によって各人は特別な賜物が与えられていると言います。それにはあなたも含まれています。Iコリント12:11「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」と、つまり、みことばが教えているのは、このパウロにしてもアポロにしても、神の恵みによって救いに与ったときに、神は彼らに特別な霊的賜物を与えたということです。パウロは「私たちはそれをを用いて主に仕えたに過ぎない」と言うのです。そして、あなたにも同じように賜物が与えられているのです。私たちの責任はその賜物を用いて主に仕えていくことです。

そして、神は賜物を与えるだけでなく、その賜物を用いて主に仕える「力」をも与えてくださいました。ですから、私たちの信仰は「私ができることをする」ではありません。それは結局、自分の力を見ていることを判断してできることだけをするということです。それは信仰ではありません。信仰は「神がしなさい」と言われることをすることです。なぜなら、そのために必要な力を神は備えてくださ

っているからです。そのときに初めて神は私たちを通して働いていかれるのです。神を信頼して歩んでいる皆さんを神は用いて神のみわざを成される。そのすべてを通して、あなたのうちに働いておられる神が明らかにされるのです。それが私たちが生かされている理由です。自分たちを自慢するために生きているのではなく、私たちのうちに働いておられる神を人々の前に自慢するのです。

ですから、もし「私は自分のできることをします」ということばだけを見るなら、注意しなければなりません。信仰者は「神がせよと言われることを私はやらせていただきます。なぜなら、必ず、神がそれに必要な力を助けをくださるから」と言うはずです。それを私たちは「恵み」と呼びます。パウロが言ったように、Ⅰコリント15：10「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と、彼はすばらしい働きをしたけれど、決して自分のことを自慢していません。彼が自慢したのは「神」です。神がその力をくださり、神がこんな私を使ってくださいと。

信仰者の皆さん、そんな人生を私たちは生きていけるのです。そのためには、神が言われたことを正しく知ること、そして、それに対して「分かりました神さま、私はそのように生きていきます。どうか、あなたが約束された助けを与えてください。」と応答するのです。神が私たちを用いて働いてくださる、神の道具として私たちを用いてくださるのです。神の御力を示すために、神ご自身の栄光を現すために…、そんな働きを神は私たちを通して成してくださるのです。幸いな生き方だと思いませんか？この偉大な神を世に証しながら生きていくのです。この方のすばらしさを世に示しながら生きていける、そんなすばらしい特権に私たちは与っているのです。パウロは力が自分にではなく神にあることを知っていたゆえに、「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」（ピリピ4：13）と言いました。これが信仰者です。神が言われたことは必ずそのようになる、神が「せよ」と言われたことは必ずできる、なぜなら、私の力は私ではなく神にあるからと言うのです。

こうしてパウロは「パウロだ」とか「アポロだ」とか言って人々に称賛を向けている人たちに対して、「それは違う！私たちは神から与えられた賜物を用いて仕えたしもべであって、あなたがたが見上げなければならないのは神だ」と言い、そして、そのことを次の6節でも同じように言います。

## 2. 称賛にふさわしい唯一のお方 6-7節

今度は私たちがだれにフォーカスを当てて、だれを称賛しながら生きるべきなのか、そのことを教えます。6-7節「:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。:7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」、この中でパウロは「パウロ自身の働き」を語り、続いて「アポロの働き」を語り、そして、「神の働き」を語ります。その上で、いったいだれが称賛に値するのか？そのことを今一度教えようとするのです。

### 1) パウロの働き

「私が植えて、」と言います。パウロはこうして農夫という比喻を使って、また同時に、建物を建てるという比喻を使って神の真理を教えようとするのです。パウロがしたことは「植えた」、つまり、種まき、開拓をしたのです。コリント教会はだれによって開拓されたのか？パウロでした。パウロがコリントの町に行くとコリント教会ができたのです。宣教旅行に三度出て行ったのはパウロです。福音が伝わっていないところに出て行って福音を語ったのはパウロです。その務めを神からいただいた、その務めのためなら私はいのちを落としてもそれは喜びだと、パウロは使徒の働き20：24で語っています。「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と。

神はこんな私に福音を語るというすばらしい務めをくださった、その務めのために殉教してもそれは私にはすばらしい祝福だと言うのです。どれ程、パウロはこの福音のメッセージ、救いのメッセージを喜んでいたのか、感謝していたのか、そして、それを語ることがどれ程すばらしい特権であるのか、そのことを心から悟っていた人物です。

さて、パウロはコリントの町でキリストの福音を語り、1年半留まってそこに教会を建て上げました。パウロが去った後、このコリントの町を訪問したのがアポロでした。

### 2) アポロの働き

(1) アポロの素性 : アポロについて、どんな人だったのか？この機会にごいっしょに見ておきたいのですが、使徒の働き18章をご覧ください。ここにアポロについての記述があります。21：24-26「:24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、」、先ず、彼はユダヤ人でした。そして、彼は「アレキサンドリヤの生まれで」とアレキサンドリヤで生まれ育っていました。アレキサンドリヤはエジプトの北にあります。紀元前332年、一般的にアレキサンドロス大王と言われますが、彼によって建設された町です。人口は60～70万と言われています。この堺市よりも少し少ない位です。そこにはユダヤ

人、ギリシャ人、そして、エジプト人が居住していたのです。アレキサンドリヤは教育の中心でした。この町の大学はギリシャのアテネの大学よりも優秀で、数学、天文学、医学、文学、芸術などの学問で知られている町だったのです。また、この町からキリストの福音がエジプト全土に、また、周辺諸国に広がっていきました。そういう町です。アポロはこの町の出身であると言います。

(2) **アポロの信仰** : 同時に、使徒の働き18章はアポロの信仰についても教えています。24節の続きには「雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。」と書かれています。「雄弁な」とは聖書の欄外のところに別訳として「学識のある」とあるように「博学な、学識のある」という意味を持ったことばです。厳格に聖書を学び教えられていたのです。というのは、「彼は聖書に通じていた。」と24節の後半に記されているからです。この聖書というのは、この当時は新約聖書は存在していませんから旧約聖書のことです。

しかも、「:25 この人は、主の道の教えを受け、」とあります。この「教えを受け、」とは「系統的に教えを受けている、系統的に学んで来た」ということです。しっかりと旧約聖書の学びを受けていたのです。ですから、大変な聖書の知識を持っていたのでしょ。ただ、知識を持つだけならパリサイ人もそうです。でも、アポロは違ったのです。25節には「霊に燃えて、」ということばが続きます。これは「何かに対して非常な熱意を示すこと」です。特に、彼は神のことにに関して非常な熱意を持っていたのです。知識があるだけでなく、その知識が彼の心を奮い立たせていたのです。神の真理に対して、また、神に対して大変強い熱い思いを抱いていた、そのような人物だったということ私たちがここから読み取ることができます。そこで彼は何をしたのか？「イエスのことを正確に語り、また教えていたが、」と書かれています。すばらしい働き人だということが分かります。

ところが、その後にもこのように続きます。【注意】＝「ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。」と。これは何を意味しているのか？彼はバプテスマのヨハネのメッセージを信じていました。ヨハネがイエスを見たときに彼は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ1:29)と言いました。この方が来たるべき救世主だと言ったのです。それをアポロは信じていたのです。ただ、イエス・キリストの十字架も、イエス・キリストの復活も、そして、ペンテコステのときに聖霊が下って信者ひとり一人のうちに聖霊が内住すること、ヨハネのバプテスマだけでなく、信者のバプテスマについても全く分かっていなかったのです。まさに、彼は旧約の聖徒の一人だったのです。

ですから、救世主が来ることも知っていたし、その旧約の教えを信じていたのです。でも、イエス・キリストの十字架、そして、その復活のことがよく分かっていなかったのです。そういう人物でした。ですから、26節にはこのように書かれています。「:26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。」、プリスキラとアクラがアポロを呼んで、イエス・キリストの十字架について復活について、神の真理を説明するのです。アポロはそれを喜んで受け入れます。大変な知識を持ち、真理に対する大変な熱意を持っていた、そのアポロがこの夫婦によってより深い正しい真理を得ていくのです。

(3) **アポロの働き** : そして、18:27-19:1「:27 そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、その弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。:28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。19:1 アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通過してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、」、エペソにいたアポロはギリシャのアカヤ地方、コリントに行きたいと願ったのです。こうして、エペソの町でしっかりと真理を得たアポロはコリントの町に渡って、そこで兄弟たちを励ましたりユダヤ人たちに神の福音を伝えたのです。これがアポロです。このような働きをしたのです。

パウロはそのことをこの手紙に記したのです。Iコリント3:6「私が植えて、アポロが水を注ぎました。…」と、パウロが開拓し種を蒔いた、そこに水を注いだのがアポロ、パウロの働きをフォローしたのです。すばらしい働きです。

### 3) 神の働き

「しかし、成長させたのは神です。」と続きます。パウロもアポロも、確かに、すばらしい働きだけども、もっとすばらしい、称賛に値する働き、それを成されたのが神だと言うのです。少し、文法的なことを言いますが、6節に「私が植えて、アポロが水を注ぎ」と、「植える」と「注ぐ」という二つの動詞は不定過去を使っています。つまり、こういうことが過去に起こったことを明らかにするのです。実際に、パウロもアポロもその働きをしたからです。ただ、もうそれは終わった働きです。パウロがこの手紙を記したときにはもうその働きは終わっていたのです。

では、6節の「成長させたのは神です。」の「成長させた」という動詞はどうか？これは未完形不定過去を使っています。この働きは過去も現在も継続しているということです。つまり、パウロが種蒔き

をしたのは過去のこと、アポロが水を注いだのも過去のこと、でも、神はそのときも働かれ、今も働き続けているということです。その上で、パウロは言います。パウロでもアポロでもない、称賛に値するお方は芽を出してくださったお方、つまり、神だと。農家が期待するのは、種を蒔いて水をやったとしても、芽が出て来なければそこに喜びはありませんから、芽が出て来ることです。

パウロが言うことは、誉められなければならないのは、コリント教会の中に救われる人たちを起こしてくださった神だということです。

**結論**： 神にフォーカスを当てなさいと7節にあります。「それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」と。「たいせつなのは、」ということばがあります。「重要な」ということです。重要なのはだれかということのを再び教えるのです。それは「神」だと。次に「植える者でも水を注ぐ者でもありません。」とあります。6節と同じことばです。ただ、違う点があります。それは6節の「植える」「水を注ぐ」は不定過去、過去のことでしたが、7節ではどちらも現在形を使っていることです。なぜ、ここで現在形を使っているのか？種を蒔く働き、水を注ぐ働きは継続しているからです。その働きは今も全世界で為され続けています。コリントだけで為されたのではなかったのです。どの時代でもどこの場所でもこの働きは変わらないのです。パウロと同じように、主から託された働きをする人たちはいるのです。いたのです。彼らは種を蒔き人々は水を注いだのです。

ですから、パウロはコリントで起こったことを話し、そして、あらゆるところで起こっていることを話し、称賛に値するのはどの時代であってもどこの場所であっても神だけであると言うのです。「成長させてくださる」ということばも現在形が使われています。この働きを神は為し続けておられるからです。

種蒔きの働きも継続し、水を注ぐ働きも継続し、そして、神が成長させるという働きも継続しているということです。過去だけでなく今も、私たちが称賛すべきお方はただ一人、それはこの神お一人だとパウロは言うのです。

進んで行く前に見ていただきたいのは、5節で賜物のことを話したときに「…主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。」と、主語が「主」になっていたことです。イエスはその働きをしてくださったのです。6節では「成長させてくださる神」と今度は「神」と言っています。こうしてまたイエスが神であることを明らかにするのです。イエスの神性をここで再び読者たちに教えるのです。

私たちも「何人の人を救いへと導いた」と救いをあたかも自分の功績のように自慢する人がいることを知っています。でも、これは間違っています。なぜなら、私たちはだれ一人として人を救いへと導くことはできないからです。私たちにゆだねられている働きは罪人を救うことではなく、キリストによる救いを人々に明らかにすることです。だから、私たちは自分の働きを自慢することはありません。私たちが自慢すべきは「主」です。ですから、この真の神に仕えることが出来るということは私たちに与えられた特権です。そのことが分かっている人は、主に仕えることが喜びです。全能の神に仕えることが出来る、私たちはそんな特権に与ったのです。神はひとり一人に賜物をくださって、そして、こんな私たちを使ってご自身の栄光を現してくださるのです。私たちはもう一度そのことを思い出さなければいけません。すばらしい特権を神は私たちにくださったと。

### 3. 主からの報い 8節

それだけではありません。こんな不完全なしもべである私たちを神は使ってください、私たちのつたない歩みを神は最後のときに誉めてくださるのです。褒美を与えてくださることが8節に記されています。「植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。」

見て来たように、「植える者と水を注ぐ者は、」パウロとアポロでした。彼らは競争し合っているのではありません。どちらがえらいか、そんなことではなく、我々は一つだと言います。働きは違うけれど一つだと。私たちは神の栄光のために忠実に仕えるしもべたちです。だから、私たちは賜物に優劣をつけることはしません。なぜなら、私たちに与えられた賜物は、全能なる神がご自身の意志をもってそれぞれに与えてくださったものだからです。

コリント教会の問題はまさにここにあったのです。賜物に優劣をつけていました。人々を見て、どのリーダーが自分の好みなのか？とそうして分派を作っていたのです。働き人はみな同じ思いを持ってひとつの働きをするのです。

8節に「それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。」とあります。「自分自身の働き」とあるこの「働き」は「苦労、骨折り」という意味があります。つまり、イエスに従って行くということは大変なことだということです。皆さんはそのことはお分かりでしょう。イエスに従うことによ

ってすべての問題が解決するのではなく、様々な問題が出て来ます。いろいろな戦い、摩擦が出て来ます。もしかすると、それによって皆さんは孤立するかもしれない、周りから嫌われるかもしれない、変人扱いされるかもしれない…。でも、あなたがその中でも主に従って行くなれば、あなたの働きに正しく報いてくださる方がおられるのです。その日が来るということを使うのです。だから、信仰者である私たちは今の周りの状況や環境など、今の時代のことだけを見ているのではなく、その先をしっかりと見据えて今日を生きることが必要です。イエスにお会いする日が来るのであって、その日を思ってこの日を生きることです。

でも、この熱心な歩み、忠実な歩みにおいて注意しなければならないことがあります。あなたの願い事を叶えていただくために主に對して熱心であること、それは正しくありません。なぜなら、その生き方は私たちが救われる前の生き方だったからです。救いに与る前の私たちはご利益宗教的な考え方でした。何かをしたから何かをもらえるに違いないと…。だから、熱心であれば神は私の願い事に答えてくださるに違いない、これだけ熱心に歩んでいるのだから、これだけのことをしているのだから、神はきっと私の願いを聞いてくださるに違いないと。この生き方の間違いは、先ず、動機が間違っています。熱心に従って行く、忠実に従って行くことが自分の欲しいものを手に入れる手段だからです。また同時に、神観が違います。熱心であれば忠実であれば神は最善を成してくださるとします。もしそうなら、神の最善は私たちが為す働きの熱心さに係っていることになります。つまり、熱心であれば最善のものが得られ、そうでなければ得られないのです。

神は常に最善のものをくださるのです。私たちが不完全な時に、私たちが目を醒まして正しい道に歩んで行けるように、神は私たちのために最善を成してくださっているのです。私たちが学ばなければいけないことは、私たちが熱心に主に仕えていくことは、それが私たちの喜びだからです。それが私たちの感謝を現す方法だからです。何かを神からいただけること、それを期待しながら主に従って行くのではないのです。私たちが気付くべきことは、神はすべてをくださったということです。私たちの永遠は決まっているし、地上の生活においても私たちが神に従って行くために必要なものはちゃんと備えられています。何か欠けているものがありますか？

私たちにそのように思い込ませたいのです。神に忠実に従って行く、聖書に従って行く、それだけでは不完全で何かが必要と言います。もし、私たちが何かを得るために一生懸命働いているとするなら、その結果、その人には神への不平不満が出て来ます。自分の思い通りにならないと「なぜ神さま、私の願い通りにしてくれないのですか？こんなに一生懸命頑張っているのに…、私はこれだけあなたに対して献身的なのに、なぜ私の願っていることを引き上げてくれないのですか？」と、いかに自己中心であるか…です。神が最善を成され、その最善に私たちは喜んで従って行く、だから、私たちの祈りは「私の願いを叶えてください」ではなく「あなたのみこころを成してください。そして、そのみこころを喜んで私が受け入れて従えるように助けてください。」です。

神観が違えば大変大きな間違いを犯してしまいます。パウロが言うように、賜物が違っても私たちは一つの目的を持って働いているのです。神に喜んでいただきたい、何とか神の栄光を現したいと。そして、私たちひとり一人の働きに対して、神はそれにふさわしい報いをくださるのです。どんな報いをいただくかはあなたがどのように生きるかに係っているのです。私が期待するものを神はくださらないからと神に責任があるわけではありません。みことばは私たちに「このように生きなさい」と教えてくれます。そのように生きるかどうかは私たちの責任なのです。みことばが教えることは、あなたがみことばに従うなら神はそれにふさわしい報いをくださるということです。

#### 4. 結論 9節

「私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。」、私たちがしっかりと覚えること、忘れてはならないことを言っています。

1) パウロたち : 初めに「私たちは」とあります。パウロたちのことです。ここではパウロとアポロのことでしょう。我々は「神の道具」と言います。この「協力者」ということばは「ともに」と「働く」ということばからできています。ですから、「ともに働く、同労の」という意味です。ただ、「神の協力者」と言うとは何か神を助けるというように取れるかもしれませんが、そういう意味ではありません。ここで言われているのは、キリストの恵みによって救われ、キリストによって賜物が与えられ仕えているしもべたちのことです。私たちはみな同労者である、神に属する者として神に仕える同労者だと言うのです。そうすると、私たちの間に優劣など存在しないのです。神の働き人の平等の関係、私たちはみな神の同労者です。私たちが覚えておくべきことは、神には私たちの働きは全く必要としないということです。神はご自身のみこころを私たちの助けなどに関係なく為されます。でも、神は私たちにこの神に仕えるという特権をくださった。救いに与った私たち、神の同労者が、心を一つにし

て神の栄光のために働くことができます。そして、感謝なことに、何度も繰り返しますが、私たちを通してご自身の栄光を現してくださるのです。このような働きに神は私たちを召してくださったのです。

2) コリント教会 : 次に「私たちは」から「あなたがたは」と主語が変わっています。働き人から今度はコリント教会の人々へと話を移します。「あなたがたは神の畑、神の建物です。」と。見て来たように、比喩的な表現を使っています。霊的に成長していくこと比喩的に、

- ・「神の畑」 = 農夫として、種を蒔いて水を注いで、そして、芽が出て成長するようにと。
- ・「神の建物」 = また、建築家のように、基礎を据えてその上に建物を建てていく、そして、完成に向かっていく。

パウロが言うことは、神は様々なしもべたちを使ってコリント教会を開墾し耕して来たのです。また、同時に、神が様々なしもべたちを使って建物を建て上げて来たのです。そこで、パウロは言います。

「畑も建物も神に属するものだ」と。だから、「神の」と書かれているのです。所有者がだれかを明らかにしているのです。コリント教会の所有者は神だったのです。そして、神ご自身がその教会の中で働きを始められたのです。それゆえに、神がその教会にあって人々の成長を願っておられることは言うまでもありません。でも、悲しいことに、この教会は成長していなかったのです。

そこでパウロは「もう一度、目を神に向けなさい」と言います。だれがどのような働きをしたかではない、だれが好きだとか嫌いだとか、そんな次元のことではない。だれがあなたを救ったのか？だれが称賛に値するお方か？その方を見なさいと。そして、その方に従うようにと言います。

私たちも注意していないと目を神から他のものに向けてしまうかもしれません。私たちにとって必要なことはだれが私たちを救ってくれたのか？ということです。だれがあなたをしもべとして働くために賜物をくださったのか？です。だれがあなたにあなたの働きにふさわしい報いをくださるのか？です。人ではありません。私たちの創造主なる神です。救い主なる方がその働きを為してくださる。その方を見て、この方だけを誉め称えながら私たちは生きていくのです。この方の教えに従って行くのです。

どうか、その思いをもってこの1週間、それぞれのところで歩んでください。主を見て主を称えながら、この1週間過ごしていきましょう。